

城素明、平福百穂兩氏委員となり本校構内中庭に記念銅柱を建造中なりしが、愈々其の落成を見たるに就き「昭和七年」四月十六日午後一時より除幕式を執行せり、當日玉章翁の遺子玉雪、茂章兩氏の外多數の參列者あり、又文庫陳列館には翁の遺作數十點を陳列展觀せり、尙結城素明氏は『川端玉章翁略年譜』を編纂せられ、口繪に玉章翁銅像、銅柱、銅柱六面文様文字拓本、箱根木賀^(遠)達望圖、箱根宮の下奈良屋楼上眺望圖、高輪汽車圖、帆船圖、林檎野菊圖を載せ、更に川端玉章翁略年譜、川端玉章先生追悼座談會など極めて有益なる文獻を收めたり、因に同座談會出席者は、結城素明、伊東英泰、西巻稻村、堀田善種、岡村葵園、川端玉雪、川端茂章、吉岡班嶺、竹田敬方、瀧田敬秀、高橋玉淵、村崎雅章、山田敬中、小柳渡風、工藤玉葉、江村隆章、島崎柳塙、緒崎英明、本橋文章、諸星成章の諸氏なり

なお、同誌「文庫彙報」欄には建碑式に合わせて四月十四日から二十七日まで陳列館に玉章が本校に遺した三百五十点余りの作品中主なものを陳列した旨記されている。

⑭ 黒田清輝胸像の除幕

昭和七年十一月二十七日、黒田清輝胸像の除幕式が行われた。これより先き、昭和三年九月、岡田三郎助、白瀧幾之助ら関係者二十四名が発起して資金を募集し、原型を高村光太郎に委嘱。完成した胸像は本校と美術研究所に寄贈された。本校における除幕式の模様を同年同月二十八日付『大阪朝日新聞』は次のように伝えた。

黒田清輝子の胸像除幕式 美術學校で

洋畫界の恩人故黒田清輝子の胸像除幕式は二十七日午後二時より東京上野の美術學校講堂において小林萬吾畫伯主催の下に舉行された。嗣子黒田文紀子、故子爵の大作『湖畔』で有名なてる子未亡人はじめ親族友人および多數の名士參列し岡田三郎助氏の式辭をもつて式ははじめられ、文紀子の除幕、白瀧幾之助氏の経過報告、胸像贈呈の儀がありこれに對し正木美術院長、和田東京美術學校長の謝辭があつて來賓の祝辭に移り、鳩山文相（東郷政務次官代讀）宮田光雄兩氏これを代表し最後に親戚總代榊山愛輔伯の感謝の挨拶をもつて同三時式を終り、胸像は永く美術學校校庭にあつて一段の光彩を添へることゝなつた（東京）



高村光太郎作 黒田清輝像 昭和7年

高村光太郎は「自作肖像漫談」（『知性』第三卷第五号、昭和十五年五月）『高村光太郎全集』第九卷所収）に、この胸像について次のように

記している。

今美術學校と黒田記念館とにある黒田清輝先生の胸像は二三年かかつて其後つくつた。これは黒田先生を學生時代によく見てゐたので作りよかつた。先生の頭蓋の形の特異さが殊に彫刻的に面白かつた。所謂法然^{まよわ}あたまである。この頃から私もだんだん彫刻性についての自分自身の會得に或る信念を持つやうになつた。

一方、本像の鑄造を受持つた高村豊周は、『光太郎回想』（昭和三十七年、有信堂）に次のように記した。

これは昭和七年に鑄金が完成しているが、門下生たちの依頼によるもので、兄も非常に氣を入れていた。はじめ誰に頼もうかといろいろ人選したようで、和田三造がしきりに兄を推薦したので聞いている。兄は学生の頃から黒田を知っていて尊敬していたし、あの首には造型的にも強く牽かれて、依頼作品にも拘わらず、また兄の厭がった故人の胸像だつたにも拘わらず、力のこもつたものになり、大変に評判がよくて和田も大いに面目をほどこしたということだ。實際この作品は兄の油ののり切つた円熟期に入つた時の制作だから、日本の肖像彫刻の内でも第一級の傑作で、黒田の性格が実によく出ていると僕も思う。

本校庶務掛作成の「金品寄付ニ関スル書類」によれば費用と制作

期間は次のとおりであつた。

原型	二〇〇〇円	昭和四年一月十日着手 同 七年六月十日竣工
鑄造	四〇〇〇円	昭和七年六月二十日着手 同 年九月三十日竣工
台座	一〇〇〇円	昭和七年 十月一日着手 同 年十一月十日竣工

これによれば原型制作に三年半もかかつたが、豊周の言うように評判は良かった。制作費二千円というのは平櫛田中の岡倉天心像が千円、長愛之の竹内久一像が四百円、北村西望の久米桂一郎像が四百五十円だつたことからして大変高い額であつた。

なお、昭和七年九月十三日付白瀧幾之助宛、高村光太郎葉書（高村光太郎全集）第二十一巻、平成八年、筑摩書房）に「今夏は猛烈な暑さだつた上、ちゑ子が七月上旬から急病にかかつて一時危篤状態にまでなり、入院騒ぎをやつて、二ヶ月間まるで看病その他で仕事も出来ず、いろいろ遅れてしまひました、まだ今月一ぱいは極めて安静を要するので訪客には失敬してゐます、除幕式を十一月にしたいだけ度いのですが如何、鑄金出来、臺がまだです。」とあり、仕事の進み具合によつて除幕式の日取りが決められたことがわかる。